日本と台湾の美術教育の比較

題材、学習指導要領や生徒の意識などについての実地調査

芸術系サブプログラム

孫　チーシュエン

【指導教員】　平野　英史　　桜井　龍　　小澤　基弘

【キーワード】 美術教育　　課題研究　　実地研究　　埼玉大学　(3～5Word で)

１．はじめに

本研究では、台湾の美術教育を広め発展させるために、自分が受けた台湾の美術教育と日本で留学してから知ることができた美術教育との違いを比較し、その結果をもとに新しい美術科の授業を提案する。

実地研究では、埼玉大学教育学部附属中学校（以下、附属中学校）の美術科の授業の参観だけでなく、台湾の中学校美術科の授業を知るために、台湾にある母校にも実際に行って授業を参観し、記録をとった。日本と台湾双方の授業の状況、教科書の使用方法および内容（題材や教材）、学習指導要領などを踏まえて、今後の課題について検討する。

中学校において「自分は絵を描くや制作などが下手だから、美術科授業は好きではない」や「美術科授業は退屈で、受けたとしても将来にはあまり役に立たない」などと考えている生徒が、美術科の授業を楽しむことができるように美術科の授業の好き嫌いの理由」を調査し、生徒にとって楽しい授業とはどんな題材なのかを考察した。さらに、生徒が今まで美術(図画工作)科の授業の中で楽しいと感じたことやこれから授業でしてみたい制作活動を調査することなどを通して、楽しむことができる美術科の題材を提案する。

日本と台湾の中学校生徒が美術授業に抱く意識は社会文化や進学制度、さらには言語などの違いによって、大きく異なるという考えに基づき、日本と台湾の双方を対象に美術科の授業に対して抱く意識をアンケート調査を実施した。実施した理由は、台湾における美術教育を授業参観やアンケートによって分析することを通して、自分が受けていた時代とは異なる最新の状況を把握することから研究を始める必要があると考えたからである。同時に、日本の中学校における美術教育の現状については、附属中学校の授業参観およびアンケートにから分析することとした。こうして得られた日本・台湾の現状のデータを比較検討することで、台湾における美術教育に必要な授業内容について、具体的な授業方法の提案を行うことを研究目的とした。

２．台湾中学校の美術教育

台湾の中学校は２学期制、学年の始まりは９月、学年末は６月であり、一日の授業は８時間、一コマの授業時間は 45 分間、そして美術科は日本の中学校と同じ週１回になっている。美術科の教科書は、美術科を含めた３つの教科の内容で構成されており「美術(視覚芸術)」「音楽」「表演芸術（演劇、舞台）」が「芸術」という一冊の教科書になっていて、各領域ごとに授業する教員が違う。

■↑中学校１年第１学期芸術科教科書目次（翰林出版）

台湾の教科書は「芸術（音楽、演劇、美術）鑑賞」「視覚芸術（美術）」「音楽」「表演芸術」４つの単元に分けられていて、美術の鑑賞と実技は同じ教員で授業を行うが、音楽と表演芸術はそれぞれの専門の教員が教えている。

①　教科書について

教科書を使って授業を行うことは普通だが、美術科は自由度が高い教科であり、今では完全に教科書を使わなくても、授業を行うことが可能になっている。しかし、教科書は教員の題材つくりや生徒が題材に対する関心を持つようになるきっかけとして重要視されている。

台湾の中学校の教科書は、主に「康軒出版」「翰林出版」「南一出版」３社の教科書が使われていて、学校教員が教科書の内容と生徒の学習情況を踏まえて教科書を選ぶ。今回は「翰林出版」の中学校１年第１学期の芸術教科書を紹介し、日本の美術教科書との違いを比べる。

上述の通り、台湾の「芸術」の教科書は３つの教科の内容が入っているため、美術科の部分のみを紹介する。

鑑賞

■単元１　美術館巡り

・台湾各地の美術館の所在地、特徴を知る

・現代芸術家を知る

以上のように、教科目標は単元の最初のページに書かれていて、一単元のは10ページほどあり、一節は１～２ページで使う。日本の「日本文教出版」の教科書と台湾の「翰林出版」の教科書をそれぞれ１ページを引用して、両者の美術科教科書の違いを説明する。

■↑中学校美術１年16～17頁（日本文教出版）

■↑中学校１年第１学期第12頁　初めての作品との出会い（原文および翻訳）

日本の美術科の教科書との一番大きい違いは、１単元を２ページ以上使い、美術の領域によって分類されていることである。日本文教出版の美術科の教科書によると、１単元はほぼ２ページで終わり、単元の最初に全体の導入の文章がない場合が多い。

②　台湾の中学校美術科学習指導要領

台湾の教育は2014年から９年間の義務教育年限を12年間に改革し、学習指導要領も12年間の内容に改訂した。現在の芸術科の最新版学習指導要領は中華民国107年（2018年）に改訂された十二年国民基本教育学習指導要領（十二年國民基本教育課程綱要）において、12年間の芸術科のカリキュラムが「視覚芸術」「音楽」「表演芸術」の内容に分けられて全て一冊に記載されている。その中の日本の中学校美術科にあたる「視覚芸術（美術）」の学習指導要領を翻訳し、紹介する。

日本の美術科の学習指導要領は小、中、高等学校が分けていて、別々で発行されているが、台湾の学習指導要領は教科書と同じ、美術、音楽、表演芸術、そして小、中、高等学校の内容を全部一冊に記載されている。そして、学年（学習段階）と教科によって分類して示されている。

台湾において第四学習段階とされている中学校３年間は、下図のように教科、学習段階を表で分類し、学習テーマ、本質、目標、内容などが書かれている。

■↓中学校 芸術科 視覚芸術（美術）学習指導要領（翻訳）

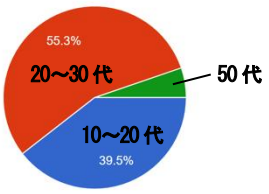
2. 視覚芸術

学習段階	学習テーマ	学習本質	学習目標	学習内容
第四学習段階…第七～九学年（中学1～3年生）	表現	ビジュアル探究	視1-Ⅳ-1 造形の構成要素とその原理を使用し、感情と考えを伝達、表現できる	視E-Ⅳ-1 色彩理論、造形表現、シンボルマーク意義。 視E-Ⅳ-2 平面、立体及び複合媒体の表現技法。 視E-Ⅳ-3 デジタル映像、デジタル媒体。 視E-Ⅳ-4 環境芸術、地域連携
		技術教育	視1-Ⅳ-2 個人またはグループの考えを、多様な画材と技法を使って表現することができる。	
		創作表現	視1-Ⅳ-3 デジタルなどの媒体を使って製作のコンセプトを伝達することができる。 視1-Ⅳ-4 色々な問題について創作活動を通し、生活環境及び社会文化に対する理解を伝達することができる。	
	鑑賞	美に関する感覚	視2-Ⅳ-1 色々な問題について創作活動を通し、生活環境及び社会文化に対する理解を伝達することができる。	視E-Ⅳ-1 芸術の基礎知識、芸術鑑賞方法 視A-Ⅳ-2 伝統芸術、現代アート、ビジュアル文化。 視A-Ⅳ-3 地域や民族の芸術、世界の芸術。
		美に関する理解	視-2Ⅳ-2 色や形の意味を理解し、多様な考え方を伝える。 視2-Ⅳ-3 芸術作品の意義と価値を理解することによって、視野を拡げる。	
	実践	美術との関与	視3-Ⅳ-1 多様性のある芸術活動に参加することを通して、地域の芸術環境に対する関心を育む。 視3-Ⅳ-2 自然環境と社会問題への関心を表す芸術活動を計画し、リポートすることができる。	視P-Ⅳ-1 パブリックアート、地域及び各民族の芸術文化の活動、芸術伝承。 視P-Ⅳ-2 展覧会の計画と実行。 視P-Ⅳ-3 デザイン思考、生活の中にある美 視P-Ⅳ-4 視覚芸術にかかわる職業の特性や種類。
		生活応用	視3-Ⅳ-3 デザインの思考と芸術知識を運用し、生活の状況に応じて解決策を考えることができる。	

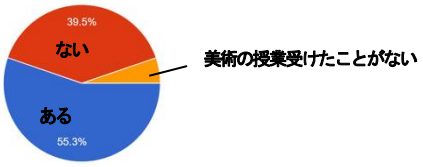
③　現在の台湾の中学校美術教育状況-１アンケート調査

中学校卒業してから既に９年経っていて、自分の母校以外の学校の美術科授業の情況ほぼ分からないため、台湾の10代～30代を対象に自分の中学校の時に受けていた美術授業についてアンケート調査を行うことにした。調査内容は美術授業の内容、教科書の使用状況、美術という教科に対する意識などを調べてみた。

年齢層



1. 美術科の授業で教科書を使ったことがあるか？



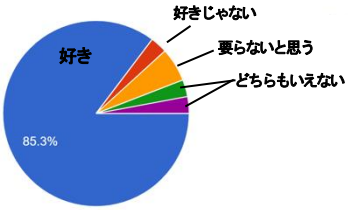
2. 教科書を使ったことがある場合は、どんな授業内容だったか？

・デッサン、油絵、水彩
・芸術史、デザイン史
・書道
・パターンアート
・西洋画鑑賞
・コラージュ
・舞台、演劇
・板絵・拓本
・水墨画

3. 教科書を使ったことがない場合は、どんな授業内容だったか？

・デッサン、水墨画、油絵
・自由製作(先生が一つのテーマを与え、生徒に自由に描かせる)
・先生がお手本した後、生徒に落書きさせる。
・マグカップ上ににプリントするイラストを描く
・点描画みたいな時間かからない軽い製作
・人形づくり
・アイロンビーズで製作
・透視図法（一点透視図、二点透視図）
など

4.美術授業は好きなのか？



5. 美術科という存在に対して重要だと思うか？どうしてそう思うか？

・回答１(20代)

すごく重要だと思う。審美感覚や美に対する意識を育むなどは教育の基本だと考える。しかし、台湾人は普段審美感覚の教育を重視していなくて（自分の中学の先生が特にそうだった）試験科目ではないし、美術科は進学に影響ないので、重視されていない。たまに他の先生が美術科の先生に授業時間を借りて国語、数学や英語などの授業を行うこともある。そのせいで大勢の人の審美感覚があまり足りなくて（まちの中の広告や看板など見れば分かる）審美感覚を失ったら、多くものの価値がなくなると考える。

・回答２（20代）

重要だと思う。美術科は美学を学ぶだけではなく、歴史も学べると考えている。美術史を通して当時の人々の思いと考えを知ることができる。美学と歴史を学ぶと同時に美術は自己表現の一つの手段だと考える。

・回答３（20代）

重要！芸術科が上手で、学科(試験科目)が苦手の生徒もいるので！芸術科みたいな授業は生徒たちの自己分析、理解に対して手助けになるし、(生徒が)多様性がある発展ができると考える。

回答４（20代）

重要。話し言葉は誠実だとは限らないが、絵は本当の自分

を表す。製作が熟練ではない人たちの作品だが、同じテーマでも、構想、構図や選択などを見て、違う人の作品から違う思いと考えを感じられる。そして多様、豊富な指導や体験は更に(生徒の)未来の可能性を開く、この社会に想像力と創作力を消させないようにできる。

回答５（10 代）

重要。子どもにとって審美感覚を育むことは生活と深く関わっていることであり、美術は質感を表現できるし、ストレス発散の手段、精神の支えにもなると考える。

以上の回答を見ると台湾の 10 代〜30 代はほぼ美術科に対して重要で必要であると考えていることを知ることができた。しかし全回答の中に「美術は将来使えない、必要ない」と答えた生徒(10 代)もいた。上述のように審美感覚の教育は重要であることを重視していない人がいるため、美術教育の必要性をこれからどう伝えていくべきか、美術教育の発展のために一つ課題として検討していきたいと考える。

④　現在の台湾の中学校美術教育状況−２実地授業参観

夏休み期間中に台湾にある母校で美術授業を参観し、現在の台湾の中学校美術教育について調査を行った。

高雄市鼓山区に建ってある高雄市立七賢中学校は 1 学年全 16 学級、1 学級は約 30 人、校舎の隣に市立美術館があるが、美術館を活用しているかは不明である。自分の在学時代は、美術教室を使ったことないため、美術教室の存在を知らなかったが、今回母校での授業参観をきっかけに美術教室の環境を知ることができた。

■↑高雄市立七賢中学校美術室

・美術教室と用具・設備

１つ大きいテーブルで１つグループ 4 人が着席、絵の道具以外に生徒の作品を展示するスペースや作品を収納する押し入れなどが設置されている。教室内の道具(水彩筆など)は教員が購入し、生徒に貸し出し、絵の具は生徒が自分で購入し、用紙は先生が準備する。

・題材について

2023 年９月 15 日、18 日に合計６時間の美術授業に参加し、題材や生徒の作品について記録をとることができた。

■題材１　にじみ絵「絵の具を泳がせる」

授業を担当した教員は、張耀仁教諭となる。

２年生を対象にする題材。この題材は水彩を使用し、２つの色と塩を合わせて、星空ような効果を出す題材である。製作手順と使用道具は以下になる

使用道具、素材:絵の具、水彩筆、塩、水、筆洗い、水彩紙

1 下描き

2 筆で水を色塗りたい範囲に塗る

3 色塗り。(補色で塗るのはしない方がいいと先生がアドバイス)

4 塩を色の塗ったところに撒く。(塩が結晶し、星のように見える)

5 乾燥させる。

この題材は水彩を使って絵を描き、普通に水彩を使用する題材は風景画や実物の絵を描くと思うが、この題材は決められたサイズのハートを描くことを指定し、生徒が指定された条件を達成しながら、構図の変化などを自分で考えて、自分の個性を表す作品を完成させるという題材である。

作品完成するための必須条件を達成する点数が最初に導入のスライドにはっきり書かれていて、どうすれば作品がいい点をとれるか、生徒たちが理解した上で製作する。客観的な評価基準であるが、この方法を見て自分は少し疑問を思っていて張先生に質問した。これは生徒と保護者からの評価に対するクレーム防止のためだと張先生が答えてくれた。

■題材２　コラージュ「既製品を壊すそして組み合わせる」

授業を担当した教員は、張耀仁教諭となる。

３年生を対象に実施する題材。３年生はこれから自分で卒業アルバムを編集するため、コラージュの製作方法を学び、練習するための題材である。

使用道具、素材:のり、はさみ、広告チラシ、画用紙

1 気に入りのチラシを選ぶ。

2 構図を考える。

3 必要な画像をはさみで切って、構図の通り貼り付ける。

この題材は最初にコラージュと関わっているポップアートについて説明し、ポップアートの作品の鑑賞を題材の導入として実施する。

2024 年９月 12、13、18 日に合計５時間の美術授業に参観し、生徒を対象に「中学美術授業に対する意識」アンケート調査を行なった。

■題材３　鑑賞「国立故宮博物院企画展―皇帝の動く花園」

授業を担当した教員は、林妍妏教諭となる。

３年生を対象にする題材。この題材を実施する翌週に修学旅行で国立故宮博物院に参観する予定。生徒たちがただ館内を回って、作品を見るではなく、作品を理解し、鑑賞が楽しめるように、館内を参観する時の課題と部分の展示作品の説明をする題材。

使用道具：筆記用具、レジュメ

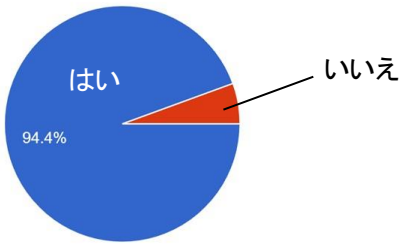
1 国立故宮博物院について「三つの国宝」

2 今回見る展示「皇帝の動く花園」を紹介し、鑑賞する際の課題を説明。

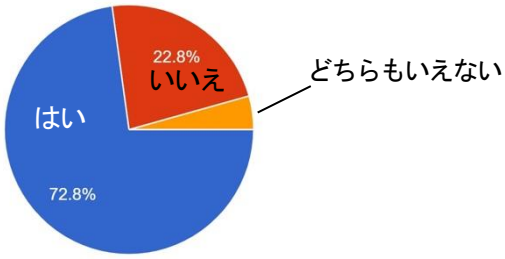
3 幾つの作品を紹介、鑑賞方法を説明。
■題材２　平面から立体「点・線・面お弁当」
授業を担当した教員は、林妍妏教諭となる。
１年新入生を対象にする題材。今回参観した授業は１年新入生の第三回目美術授業、点・線・面を知り、点・線・面を使って自分の理想なお弁当を描く題材。
使用道具：シャープペンシル或は鉛筆、色鉛筆
1 前回の授業で描いた点・線・面お弁当紙を返却。
2 色塗りする。
3 立体の描き方「一点透視法」・「二点透視法」を説明。
4 一点透視法と二点透視法を実践。
■題材３　撮影「青春の鏡花水月」
授業を担当した教員は、呉依懃教諭となる。
２年生を対象にする題材。撮影（カメラ、写真、フィルム）の発祥についてを紹介し、写真の鑑賞からカメラの原理、歴史まで、最後は実際に写真を撮る題材。
1 写真の鑑賞。（この写真を見て、どう思う？どんな情報を得る？）
2 「写真は何のため存在しているか？」について考える。
3 カメラの歴史について紹介。「カメラはいつからあったか」について考える。

■実地授業参観のまとめ
今回の実地授業参観、調査は日本の中学校の美術授業との違いや現在の台湾の美術授業はどんな題材で授業を行なっているかなどを知るために行なった。しかし両方の美術科授業を参観し、美術科授業の題材は自由度が高くと考え、両方の美術授業もその学校と地域の特徴があると考えられ、違いを比較することは難しいという結論に至った。

３．現在の中学生の美術授業に対する意識調査結果、及び比較結果。
現在の中学校生徒が美術科授業に対して、どんな意識を抱いているか、日本と台湾の中学校生徒は文化、進学制度や社会の雰囲気などの影響による意識が違いがあると考え、埼玉大学教育学部附属中学校の生徒を対象に「美術授業抱く意識調査」を実施し、同じ内容を台湾の高雄市立七賢中学校の生徒に実施した。調査内容は生徒たちが美術授業に対する好き嫌い、美術授業は自分の将来に役立つと思っているか、今まで受けた美術授業の中で楽しいと思っていたこと、制作などを調査した。アンケート調査を受けた日本の中学校生徒は１年生２クラス、２年生１クラス、合計 90 名、台湾の中学校生徒は１年生１クラス、２年生１クラス、３年生１クラス、合計 92 名。
■１. 美術の授業が好き（楽しい）　日本中学校生徒



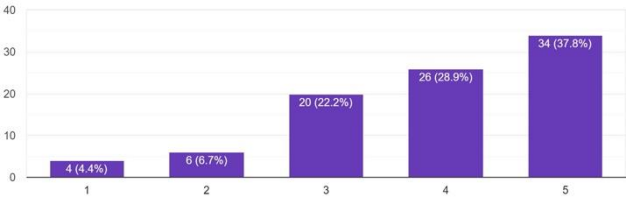
〇美術科授業が好きの理由
・絵をかくのが好きだから
・何かを作るのは楽しいから
・絵を描くこと、芸術が好きだから
・自分が表したいことを表す手段がたくさんあるから
・昔、美術を習っていたし、キャンバスに絵をかくことが好きだから
・どんどん作り上げていくのが楽しいから。
・いろいろなことを体験できるし目の保養になるから
・絵を描けるしそれになおその絵に何を工夫したかなどを考えることができる
・小学校の時から作品を作ったり見たりすること、それに関することを知れるのが好きだったから
〇美術科授業好きではない理由
・絵をかいたりするのは好きではないから
・絵をかいたりするのが苦手だから
・絵をかいたり何かを自分で作ることが苦手だから。
・工作が好きで小学校の時の図工も楽しかったから
・英語の授業は苦手だけれど、将来使うことになるから頑張ることができる。 体育の授業は将来使うかどうかわからないけれど楽しいから頑張れる けれど、美術は苦手で将来使うと思うことができないから。
■１. 美術の授業が好き（楽しい）　台湾中学校生徒



〇美術科授業が好きの理由
・絵を描くのが好き（楽しい）だから
・勉強になるから
・（授業内容）ストレスがないから
・自分が美術の才能があるか知ることができるから
・様々な絵が描けるから
・偶に見る動画が面白いから
・担任の授業なので楽しい
・日常生活と関わり生活の芸術を感じることができるから。
・自由度が高いから
〇美術科授業が好きではない理由
・退屈だし、先生はセンスがないから！
・自分は飽き性だから。
・美術授業は時間の無駄だと思うから
・自分は想像力がないので、面白い作品が描けない
・絵描きと手作りが下手だらか

■２．自分の将来に役立つと思う。　日本中学校生徒

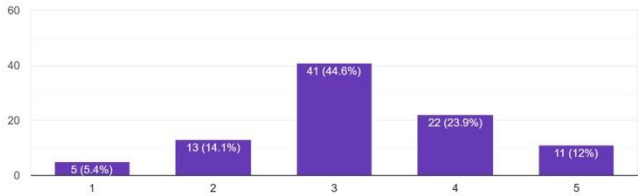
思っていない　　思っている



〇将来に役立つと思っている理由
・デザインのセンスが必要な仕事に就くかもしれないから
・表現することはどんな仕事にもつきものなのでどんな仕事に就いても美術で学んだことが活きると思ったから
・美術館などに行く場合にうまくいくかもしれない。
・何か取引する場合に美術の知識にが必要かもしれない。
・自分で表現することは自分の気持ちを伝えることにもつながると思ったからです。
・図やポスター等を作る時にどんな材料を使ったらいいのかわかるから
・これからもその先も美術の授業で習ったことは社会や世界を見るとたくさんのことがあるから。
・色の知識を知れたから。
・将来会社の商品開発部になるかもしれないから
〇将来に役立つと思っていない理由
・将来の夢があるが、美術は全く使わないし将来役に立つかといわれるとそうではないから
・将来美術家になろうとは思わないし、自分の将来の夢で美術の技術を使うとは思わないから。
・将来、美術を使う仕事にもつかないだろうと思っているから。
・感性を日常で使うことが少ないと思うから

■２. 自分の将来に役立つと思う。　台湾中学校生徒

思っていない　　思っている



〇将来に役立つと思っている理由
・成績に役立つから
・考えたものを作り出せるから
・日常生活中の物事を観察することができるから。
・将来は芸術の勉強がしたいから。
・将来エンジニアになったら何か役に立てるから。
・数学の問題偶に絵を描く、きれいに描けないと点数もらえないから。
・歴史の勉強もできるから。
〇将来に役立つと思っていない理由
・画家になるつもりはない、絵を描く時間もないから。
・お金稼げないから
・役立つかもしれない、役立たないかもしれない

■３. 今まで一番楽しいと感じたこと　日本中学校生徒
・粘土で人を作ったこと。
・工作などで自分の思い通りに作品が作れた時。
・木をのこぎりで切って、ボンドでつけて作品を作る授業。
・何かを描くのではなく、何かを作る授業の時。
・デザインを考えること。
・木と金属を使って何かを作る学習。
・段ボールを使って自分なりの家やマンション(いろいろ)を作ったことが楽しかった。
・自分的にうまく完成できたとき。
・他人から好評だったとき。

■３. 今まで一番楽しいと感じたこと　台湾中学校生徒
・アルミワイヤーで名前を作った時
・粘土で人形を作った時
・作品を完成した時
・仮面のデザインを描く時、好きなアニメキャラクターと同じメイクを描いた
・先生が「撮影の発祥」を説明している時
・小学校の時、彫刻刀で自分の好きなものを作った。(凸版印刷)
・自分がきれいだと思う星空を描けた時。
・先生が作品を褒めてくれた時。
・水墨画を描く時

■４. これからはどうな制作をしたいか　日本中学校生徒
・立体作品を作りたい
・デッサンをしたい 。
・鑑賞が楽しかったのでまたやりたい。
・服、商品のデザインを一から考えること。
・食べ物やおもちゃの商品はパッケージから中身まで全部考えたいです。
・ミニチュア
・自分の個性が出るもの
・実際に一つ、家におけるサイズの家具を作ってみたい。
・全員で何か大きいもの(平面でも立体でもを作りたい。それを通してクラスの絆、団結力というものをより深めたい。

■４. これからどうな制作をしたいか.　台湾中学校生徒
・アニメのキャラクターを描いてみたい
・持ち歩ける祭壇(アニメグッズ飾る場所)を作りたい。
・単純な絵画
・立体の模型をつくりたい
・ダビデ像を作りたい
・複雑すぎない建築の模型を作りたい

４. 調査結果のまとめ

今回のアンケート調査を通して、日本と台湾の中学校の生徒が美術科に抱く意識（生徒たちがどんな題材に興味を持つか）から、今までの美術科の授業に対する満足度などを知ることができた。調査結果を比較した結果、日本と台湾の中学校の生徒の美術科の授業に抱く意識の違いを２点、共通点が１点分かった。

第１は、今回の調査を実施する直前に、「今まで美術授業中に一番楽しいと感じたこと」と「これからの美術授業でど

うな制作をしたいか」二つの問題に対して、生徒たちに「すぐ思いつくこと」を記入するように、もし思いつくことができなければ「なし」と記入しても構わないと伝えた。その調査結果、日本中学校生徒は一人だけ「今まで美術授業中に一番楽しいと感じたこと」に「なし」を記入し、その他の全員が答えを文章で記入した。

そして、台湾中学校の生徒は「今まで美術授業中に一番楽しいと感じたこと」と「これからの美術授業でどうな制作をしたいか」二つの問題に対して「なし」を記入した生徒は複数あり、特に今までの美術科の授業で一番楽しいと感じたことをすぐ思いつくことができない生徒が多いことが、調査を通して分かった。

第２は、「美術授業で学んだことは自分の将来に役立つと思っているか？」に対する回答について、自分が役立つと思っている程度によって1～５（５が最高点）を生徒に選ばせた。アンケート調査を受けた日本の中学校生徒の 66%が４と５を選んだが、台湾の中学校生徒が一番選択した数が多かったのは中間値の３だった。

「そう思っている理由」に対する回答も「役立つかもしれない、役立たないかもしれない」という不確定な答えが多い印象がある。「美術科の授業は自分の将来に役立つ」と確信する日本の中学校生徒は多いことと比較し、台湾の中学校生徒は「美術授業は自分の将来に役立つと確信できない」と思っている場合が多いという結果が見られる。その原因として考えられることは、授業を退屈だと決めつけ、消極的な態度で授業に取り組む生徒が多いことにあると言える。

日本と台湾の生徒の共通点は、美術科の授業が好きではないが、自分の将来に役立つと確信している生徒が多くいたことである。その理由には、主に日常生活の中で、自分を取り巻く環境に対する見方や自分の将来の職業に関わる可能性があるという答えが見られた。

今回の調査を通して、日本と台湾の中学校の生徒による美術科の授業に抱く意識に大きな違いがあることを知った。その違いが生じた原因は「学校の教育方針」「保護者の教育方針」「社会中の雰囲気」「小学校から受けた美術(図工)教育」の４つの影響が大きいと考えることができる。

さらに、附属中学校の生徒は、附属小学校を経て入学した生徒が多く、多彩な図画工作科の授業を経験したことで、中学校で高度な美術科の授業を楽しむことが出来ている印象を受けた。楽しんで活動をしていることで、自然と美術科の授業が好きになったと考えることができる。他の公立中学校の生徒を対象にアンケート調査を行なった場合には、違う結果が出る可能性があると言える。

また、台湾の高雄市立七賢中学校の生徒は様々な異なる小学校から進学し、受けていた美術(図工)授業も色々があるため、元々美術科かの授業が好きではない、或いは図画工作科の教育を重視していない小学校から進学した影響で、美術科の授業が、退屈だと考えたり、時間の無駄と思う生徒がいた。

台湾では近年、著作権を重視し始めているが、10 年前はインターネット上で違法掲載された漫画を読むことやアニメを見ることなどは日常茶飯事であることから、絵描きやデザインなど芸術と関わる仕事はあまり価値がないという価値観を持つ人が多い。それでもメディアの進歩により、アートやデザイン関係の教育や仕事など重視するようになったが、昔の価値観や前の世代の思想に影響されている人がまだ多く、現在の台湾の中学校の生徒もそれが原因で「自分は絵を描くのが下手で、将来的に美術と関わる仕事に就くつもりもないから、美術科の授業は役に立つと確信できない」と言ったり、「美術科の授業を受けても時間の無駄だ」と思うようになっていると考えられる。

「美術科の授業は時間の無駄ではない」や「美術科の授業は将来に役立つ」などといったことを生徒に伝えるためには、生徒が美術科を楽しむように仕向けることが重要だという考えに至り、そのためには生活に役立つ教育を多く含んだ教材を開発し、自由度が高い授業を提供する必要があると言える。

５.調査結果の応用について

アンケートの結果に基づいて、日本の中学校の美術教育の実践を参考にして、台湾における美術教育の実践に必要な題材・教材について以下のように考えた。

①「一番楽しいと感じた授業内容」から考えた実践、アケートでは、以下の内容が挙げられていた。

・粘土で人を作ったこと。
・工作などで自分の思い通りに作品が作れた時。
・木をのこぎりで切って接着剤で接合して作品を作る授業。
・何かを描くのではなく、何かを作る授業の時。
・デザインを考えること。
・木と金属を使って何かを作る学習。
・段ボールを使って自分なりの家やマンションを作ったことが楽しかった。
・アルミワイヤーで名前を造形した時
・粘土で人形を作った時
・仮面のデザインを描く時、好きなアニメキャラクターと同じメイクを描いた
・小学校の時、彫刻刀で自分の好きなものを作った（版画）。
・自分がきれいだと思う星空を描けた時。
・先生が作品を褒めてくれた時。
・水墨画を描く時

上記の内容から導き出される実践は、以下のようになる。

素材を大切にした立体造形の制作を楽しいと感じていることが分かったため、彫刻や工芸、さらには立体デザインに関する教材を増やすことが大切であるという結論に至った。附属中学校では、立体造形に関する次のような革新的な授業が行われていた。

■題材１　建築模型づくり「わたしの居場所」

授業を担当した教員は小西悟士教諭である。

２年生に対象とする題材。別所沼公園にある「ヒヤシンスハウス」を原型として、「自分の休みの空間」、「リラック

スできる空間」の建築模型を作る。
1 ヒヤシンスハウスを紹介。
2 ヒヤシンスハウスの型紙を配り。（ヒヤシンスハウスの型を使っても良いが、ヒヤシンスハウスの形に拘らず、完全自由に作ることもできる。）
3 制作開始
　この題材は自由度が高い題材であり、制作に使う素材も生徒自ら決めることができる。制作の時間は手を止まっている生徒がいない、自分の理想な居場所を作ることに夢中していると見られる。
　このような授業を台湾の中学校において行うことで、生徒の表現の可能性が高まると美術科授業に対する興味を引き出すことができると考えられる。

■↑生徒たちが制作中の「わたしの居場所」
②「将来の役に立つと考える内容」から考えた実践、アケートでは以下の内容が挙げられていた。
・考えたものを作り出せるから
・日常生活中の物事を観察することができるから。
・将来は芸術の勉強がしたいから。
・将来エンジニアになったら何か役に立てるから。
・数学の問題偶に絵を描く、きれいに描けないと点数もらえないから。
・歴史の勉強もできるから。
　上記の内容から導き出される実践は、以下のようになる。
　日常生活と関わっている内容、実用性がある制作や他教科と連携できる内容などを授業題材にすることによって、生徒は「美術科授業で学んだ内容は日常生活と関わって、これからも役立つ」と意識し、積極的に美術科授業を取り組むようになる可能性が高いと考えられる。埼玉大学附属中学校では、日常生活の実用性に関する次のような革新的な授業が行われていた。
■題材　模型づくり「附中魅力化プロジェクト」
　授業を担当した教員は吉田真梨教諭である。
　３年生を対象にする題材。附属中学校の中庭を改造することを想像し、デザインを考え、平面図と 1/100 の模型を作り、学校の魅力を増やせる題材。グループもしくは個人で制作しても良い。
1 現在の中庭の問題点を考える。
2 実際に中庭を見に行く。
3 デザインの定義を説明(使い道によって物の色を決める…等)
4 グループワーク(問題点、改善策を考え、ワークシートにスケッチし、模型の制作)もしくは個人制作
　この題材は、生徒自分が毎日通う学校の中庭を観察し、学校の中庭を自分が魅力的だと思う様子にデザインする題材である。中庭が持つ使用上の問題点とその解決策とを考えることを通して、生徒の観察力と思考力を磨き、造形を試行錯誤することを通して、デザインの定義や知識などを学ぶことができる。
　このような授業を台湾の中学校において行うことで、生徒の観察力と思考力を磨き、美術科授業で学ぶ知識は日常生活に役立つと思うようになり、積極的に授業に取り組むようになると考えた。

６.おわりに
　日本と台湾の中学校の美術科の教科書や学習指導要領を比較し、10 年前から、中学生が美術科に抱く意識を調査することで、現在の台湾の美術教育に必要な授業題材を検討した。その結果、「上手ではない(想像力がない)から美術科授業は好きではない。」「授業内容は将来に役立たないから、受けても時間の無駄だし、退屈だ。」と考える生徒の美術科の授業に対する興味を引き出せる題材と、さらに日常生活と関わる題材の両方が必要だという結論に至った。
　そして、打開案のコンセプトとなる３つの要点「生徒が興味持つ題材」「日常生活と関わる題材」「役立つ知識を学べる題材」を扱う授業について、実地研究を行った学校である附属中学校での美術科の実践の中で検討し、その結果、同校において美術科の専任教員（小西悟士教諭・吉田真梨教諭）による二つの授業実践に、台湾の中学校における美術教育の問題点を改善しうる内容があると考えた。
　今回の授業実践の研究により、台湾の美術教育に必要となる題材を発見することができたので、今後は今回の研究で記録した情報を基に、これらの題材を台湾の中学校で試験的に実践することで、台湾の教育現場にそった内容へと修正・改良を加えていきたい。

■参考文献
翰林出版，『112 國中藝術 1 上課本(中学校芸術 1 年第一学期教科書)』
教育部，『十二年國民基本教育課程綱要 國民中小學暨普通型高級中等學校(十二年国民基本教育学習指導要領　小中学校兼普通高等学校』
日本文教出版『中学校美術１年教科書』